

自分を「デク人形」と評した三島由紀夫を演じようとした高倉健

死去した高倉 健については私が一番元気だったころに観た映画の中にとどめておこうと思い、書くことはないと思っていた。ところが、高倉 健の追悼文として美術家の横尾忠則が複数の雑誌等で、「幻となった三島由紀夫映画」(『中央公論』15.1)について書かれているのを目にして書いてみる気になった。横尾は《礼儀や礼節を大切に》高倉に触れながら、同様に《礼儀や礼節を大切に》してきた三島を思い浮かべて、三島の自刃後、高倉から三島について《いろいろ尋ねられ》、高倉が三島の《映画を撮ろうとしていた》ことを知る。《企画は煮詰まり、健さんはアメリカ人の映画監督との打ち合わせのために、何度もロスへ渡っていました。次第に健さんの中に三島さんが乗り移っていくかのようで、僕は三島さんの霊が健さんに映画を作らせようとしているのだなと感じていました。》特別寄稿「憂魂、高倉健」『文学界』(15.1)という表題自体が「憂魂、三島由紀夫」と重ね合わされているのが感じられるが、そこではポール・シュレイダー監督と明記されている。

三島の未亡人の了解を取る段階にいたり、《こういうことはプロデューサーに任せておけばいいはずですが、健さんとしては礼を尽くし、筋を通したかったのでしょう。僕はその場で三島さんの奥さんに電話をかけました。僕が高倉健さんを紹介したいと言うと、ただそれだけで、勘のいい奥さんはこう答えたのです。「高倉さんが主人の作品を映画にするのならお目にかかります。でも、主人の役をなさるのならお断りします」と。僕は仕方なく、奥さんの言葉を伝えました。健さんは黙ったままじっと考え込み、しばらくしてから顔を上げ、言うのです。「横尾さん、ご遺族に迷惑をかけるわけにはいきません。わかりました。この映画は断念します。》『文学界』版では、《礼節とはこういうことだと教えられた。》という横尾の感想が記されている。

高倉と一緒に三島の墓参りに行ったエピソードにも簡単に触れられており、《健さんは珍しく、「横尾さん、カメラを持ってきてください。一緒に撮りましょう」と言って、三島さんのお墓の前で記念撮影をしました。実現できなかった映画の、健さんなりの決着のつけ方だったのかもしれない。》『文学界』版ではもう少し詳しく記されている。

《三島さんが没して30数年が経っていた。だけどそれまでにぼくは一度も参ったことがなかった。一人で行くのではなく誰かと行きたかった。そこに健さんの誘いがあった。そして一緒に参ることになった。その時、健さんの方から記念写真を撮りましょうと言われて三島さんの墓の前で写真を撮った。健さんは例によってカッコよく写っていたが、ぼくは墓地の木漏れ日が顔や身体に当たって、何だか墓掘り人夫みたいな顔に写っていた。この墓参りは誰にも語らない約束をした。期せずして今日(この文を書いた日)は8月15日お盆だ。二人で参ったのも今頃だった。約束を破ったけれどぼくには三島さんから「ちゃんと書いとけよ」と言われているような気がしてならない。そして三島さんは今でも健さんに自分を演じてもらいたかったと思いつけているように思える。写真を受け取った健さんから「アルバムに貼って大事にします」という礼状がきた。》

三島由紀夫がらみのエピソードは『文学界』版にはまだあり、私には興味深いので、それらの箇所を取りだしておきたい。

《こんな現を見た。健さんと会うことになる時はいつもぼくの一方的な要求から始まる。1970年ぼくは「私のアイドル」(後に『記憶の遠近術』)という写真集を篠山紀信さんに撮ってもらうことになって、健さんにも登場していただいた。この写真集の序文は三島さんに書いてもらったが、当然三島さんもぼくのアイドルだ。この写真で三島さんはふんどし一丁になって鉢巻を締め、日本刀を抜き、学生服姿のぼくの首を生首のように抱いた恐ろしい写真を日の丸の旗を背景に撮ったが、死を決意した時期だけに三島さんの個人メッセージが強調されていた。一方健さんとの写真は何んとも温かみのある写真だった。健さんが座ったぼくの背後から両肩に手を掛けたなんともテレた写真だが、ぼくが一番気に入っている健さんとのツーショットの一枚である。三島さんの演出過剰の写真と対照的な自然体写真である。》

《こんな現を見た。健さんからたまに電話を頂く時があるが、必ず健さんから直接である。三島さんもそうだった。事務所の者が電話を取ると、「俳優の高倉健です」と名乗られるのだ。》この高倉健からの電話についてはなにかで読んだのであるが、映画『野生の証明』で共演した子役の薬師丸ひろ子が気に入った高倉が、歌手の玉置浩二と結婚した彼女に電話をしたときに「姫、いますか、高倉です」

と名乗り、玉置がどちらの高倉さんですか、と尋ねると、「俳優の高倉健です」と答えたのでビックリし、彼女の知り合いが大物揃いのために玉置はビビルようになったことも離婚の一因だったという。《こんな現を見た。1969年、ぼくは初のエッセイ集「一米70糶のブルース」を出した。その時健さんに帯のコメントを頂いた。そこにはこう書かれている。「横尾さんの最大の魅力は、強靱で凄まじい精神。まさに現代の好漢です」と。三島さんは「あれほど人をくっている人間も知らない。ぼくもあんなにうまくはなかった」と。ぼくが33歳の頃だ。》

三島がらみではないが、次の逸話も興味深いので取りだしておきたい。

《こんな現を見た。健さんとクリント・イーストウッドは一歳違いだ、健さんは彼を尊敬しながらも意識し、ライバルでもあったように思う。出たばかりの「文藝春秋」にクリント・イーストウッドのインタビュー記事が掲載されていたので送った。すぐお礼の手紙が返ってきた。健さんを取り巻く記者が少し前向きからクリント・イーストウッドとの共通項を指摘するようになったと。インタビュー記事の中で「大勢の人達が私が引退するのを心待ちにしているようだが」のくだりが面白かったそうだ。健さんも映画が公開される度に「これが引退作品？」と書かれるという。だけど「お陰様で？興味のあるなしに関わらず出演依頼の脚本が結構届けられます。ですので、今のところ、引退は頭にありません。楽しみたいと思います」と結ばれていた。》

最後に誰がらみでもない、映画のイメージとそっくり重ねられる高倉 健をここに刻んでおきたい。《こんな現を見た。ある夜、健さんは一人で平河町にあったぼくの職場にふらりと現れた。紺のニット帽に濃紺のジャンパー姿で、顎には珍しく無精髭が伸びていた。少し疲労の色が浮かんでいた。なんでも北陸地方から車で東京に戻って来たとか。健さんは北陸の海岸沿いの道路で目撃したという夫婦喧嘩の光景をしみじみ語られた。「一体何があったんですかねえ」。夫婦喧嘩は犬も食わぬと言うが、些細なことが取り返しのつかない大きい問題に発展しかねない。今でもぼくの目には日本海の砂浜に吹き荒れる北の冷たい木枯らしの中で、車を降りた夫婦が罵声を浴びせながら纏れ合うシルエットが暗い海の高波の音を背に影絵のように踊っている光景として、まるで自分が見てきたような活劇画となって映るのだった。健さんは再び「何かあったんでしょうね。切なかったですね」と言葉を飲み込みながらポツリと言われた。こんな淋しい姿の健さんはあとにも先にもなかった。ぼくも思わずこの健さんの目撃された光景に同化して、夫婦とは、人生とは、と人間に与えられた宿命と運命の機微について思わず心を寄せるのだった。》

横尾が高倉 健の追悼文を書きながら、三島由紀夫をどうしても引きずりださずにはいられなかったように、私も三島由紀夫の追悼文でもあるかのような横尾の追悼文に引き寄せられたのであるが、実は三島は生前におそらくたった一度と思われるが、高倉 健について触れている。それも称讃ではない。

詩人の平出 隆が小雑誌『scripta』(15 winter)の連載「第14回 常盤橋の小屋」でそのことを思い出させてくれた。「常盤橋の小屋」とは少年～青年時代の平出がよく通った映画館である。受験浪人時代に彼は山下耕作監督の『博奕打ち 総長賭博』(1968年)を観ているが、三島は『映画芸術』1969年3月号にこの映画評を行っていた。平出は三島の映画評を次のように述べている。

《たしかにそれは、あの雨の墓地のシーンだったと思う。三島由紀夫は阿佐ヶ谷の場末の映画館でこの映画を観たあと、「何という絶対的肯定の中にギリギリに仕組まれた悲劇であろう。しかも、その悲劇は何とすみずみまで、あたかも古典劇のように、人間的眞実に叶っていることだろう」と賞嘆し、「これは何の誇張もなしに「名画」だと思った」とも記した。》

「雨の墓地のシーンと、信次郎の松田殺しのシーンは、いづれもみごとな演劇的な間と、整然たる構成を持った完全なシーンで、私はこの監督の文体の確かさに感じ入った。この文体には乱れがなく、みせびらかしがなく、着実で、日本の障子を見るように明るく規矩正しく、しかも冷たくない。その悲傷の表現は、内側へ内側へとたわみ込んで抑制されているのである。」

平出は三島のこの文章に感動したが、一つだけ、《鶴田浩二のすべてを称讃しながら、それに比べると「さしも人気絶頂の高倉健もただのデク人形のように見える」と書いている箇所》に、引っかかりざるをえなかった。その一節で平出が《三島由紀夫から距離をと》ったのは、彼が高倉 健ファンであるという以上に、高倉 健が平出と同じ言葉の響きをもつ北九州出身であるということが大きかった。平出とは異なる私からすれば、三島の指摘どおりであり、なんの違和感もなかった。

高倉 健がこの三島の映画評を知らないはずがなかった。にもかかわらず、彼は三島を演じたかったのである。おそらく三島事件の衝撃がそのような些事をかき消してしまったのであろう。高倉 健という人間の器がそこに見られるのではないだろうか。